

● 優秀賞

学力低下を克服し、一人一人が学びの 実感をもつ学習指導

愛知県知多郡東浦町立石浜西小学校 たけうち まなぶ 竹内 学

1 はじめに

東浦町立石浜西小学校へ新任として赴任して、3年が過ぎた。講師経験のあった私は、前任校での学級経営のイメージをもって、石浜西小学校へやってきた。しかし、石浜西小で、そのイメージは一瞬にして壊れた。「授業を始めようとしても子どもたちはなかなか席に着かない。」「授業が始まっても教科書やノートを出そうとしない。」「授業中の私語が多い。」など、子どもたちからは学習に対する意欲がまったく感じられなかったのである。

そこで、子どもたち一人一人に学習に対する意欲……できる喜び、わかる喜びをもたせようと考えた。私なりにそれを「学びの実感」と考えた。すなわち、「学びの実感」とは、《楽しさの実感、自信の実感、達成の実感》をもたせることと考えた。

学習意欲がないから学力が低い、学力が低いから学習意欲がない、こうした悪循環を打ち切ろうと考えたのである。

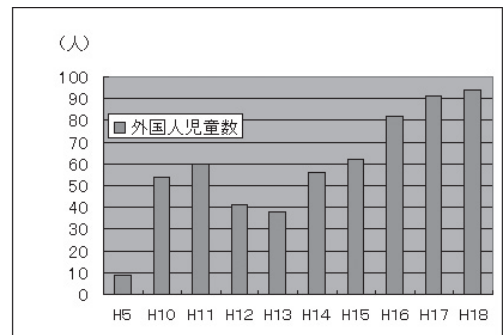
2 主題設定の理由

(1) 児童の実態

本校の校区は大半が県営の住宅団地であり、全児童がその住宅団地に住んでいる。本校には2つの大きな特徴がある。

第一に、外国人児童が多く在籍しているということである。平成5年度からその数は、徐々に増え、現在本校に在籍する外国人児童は90名（学校全体の約1/3）にものぼる。本

学級にも、クラス全体の約1/3にあたる8名が在籍しており、その国籍もブラジル、チリ、ボリビア、ペルーなど様々である。中には日本語をほとんど話せない児童もあり、文化・生活習慣に大きな差がある。



●図1／本校における外国人児童数の推移

第二には、経済的に苦しい家庭が多いことである。母子家庭・父子家庭の児童は、94名（全校の1/3）、要保護・準要保護家庭の児童は72名（全体の1/4）にものぼる。保護者は遅くまで就業しており、残された子どもは、テレビやゲームに子守りをしてもらっているのが現状である。子どもたちの学習の世話をしてくれる保護者は少なく、家庭の教育力は大変弱い。学習塾へ通う児童も極端に少なく、本学級でもわずか2名にすぎない。子どもたちは、学習環境に恵まれていないのである。

このように本校では、子どもたち一人一人の学習意欲が低く、家庭の教育力もあまり期待できない状態である。

(2)児童へのアンケートから

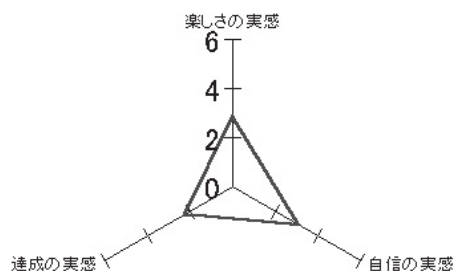
私は現在6年生の担任をしている。この学年は昨年度からの持ち上がりである。初めて担任した5年生の1学期に、私が強く感じたことは、子どもたちの学習へ向かう意欲が非常に乏しいということである。全体的に授業中にざわざわした感じがあり、落ち着かない。そして、鉛筆やノートさえ出そうとしない児童も見られた。そこで、平成17年度5月に、学習に対する実態を把握するための意識調査を実施した。調査は質問紙法を用い、前述した「学習の実感」《楽しさの実感、自信の実感、達成の実感》についての項目で調査した。

【楽しさの実感】あなたは勉強を楽しみますか。

【自信の実感】あなたは自分がどのくらい勉強したことをわかっていると思いますか。

【達成の実感】あなたは授業後に、自分がしっかり勉強できたと思うことがどのくらいありますか。

これらの質問に対して、「すごく」「わりに」「少し」「どちらともいえない」「あまり」「ほとんど」「ぜんぜん」の7段階の評定尺度（各項目最高6点、最低0点）を用いて回答を求めた。そして、項目ごとに平均を集計した。結果は図2のとおりであった。



●図2／学びの実感に対する意識調査の結果

(3)主題の設定

調査結果では、予想していた通り多くの子どもが、「学びの実感」をもっていないとい

うことがわかった。特に、できたという喜び、達成の実感をもつ子どもはほとんどいない状態であり、学習に参加していないとさえいえる。一方、数年前から学力低下、学力の2極化が叫ばれている。本校では、この中の下位のグループに属する子どもが多い。「何とか子どもたちを変えたい」その思いから本研究主題を設定した。

学力低下を克服し、一人一人が学びの実感をもつ学習指導
～多様な学習方法、学習環境を取り入れた「〇〇学習」を通して～

3 研究仮説

一人学びを中心とする2教科同時進行単元内自由進度学習（本校では「〇〇学習」と呼ぶ）において、

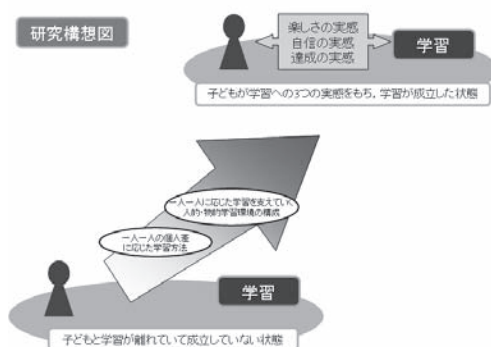
○一人一人の個人差（興味・関心、習熟度、学習ペース）に応じた学習方法〈仮説1〉

○一人一人に応じた学習を支えていく人的、物的学習環境の構成〈仮説2〉

を進めれば、学力低下を克服し、子どもたち一人一人が「学びの実感」（“楽しさの実感”“自信の実感”“達成の実感”）をもつことができるであろう。

4 研究の計画

(1)研究の構想



(2) 仮説を検証するための手立て

① 一人一人の個人差に応じた学習方法

前述したが、子どもたちの学習における個人差は、本学級においてかなり大きい。そこ

で、一人学びの「〇〇学習」のなかで、この個人差へ対応する手立てを以下のように3点考えた。

	学習における個人差	個人差に対応する学習方法の工夫
手立て1	学習ペースへの対応	2教科2単元を同時に取り扱うことで、十分な学習時間を確保し、興味・関心をもった学習への時間に当てられるようにする。
手立て2	習熟差への対応	コースを何種類か設定する。習熟の早い児童のために発展課題を用意する。
手立て3	興味関心への対応	学習の手引きを作り、その手引きにしたがって単元内を自由進度で一人学びをさせる。

② 一人一人に応じた学習を支える学習環境

「〇〇学習」において、子どもたちが自分で学習を計画し、その学習を進めていくこと

を支援するためには、人的・物的学習環境が必要となる。このため、以下の2点の手立てを考えた。

	学習環境	学習を支える工夫
手立て1	人的環境	・ 学年によるチーム・ティーチング ・ 地域のボランティアの導入
手立て2	物的環境	・ 学習スペースの確保 ・ 学習材の準備と作成 ・ 掲示物の作成

5 指導の実践

(1) 「〇〇学習」の進め方

本校では、2教科同時進行単元内自由進度学習を昨年度より実践している。「〇〇」としたのは、子どもたちが自分なりの名前、例えば、「ダブル学習」「ヤルキー学習」などを考えて呼べるようにという思いからである。

「〇〇学習」とは原則として一人学びの学習である。この学習は、学年単位として行われる。それぞれの教科の単元の合計時数を子どもに任せて、それぞれが学習計画を立案し、スタートする。子どもに任せるとはいえ、学習の始まる前にはガイダンスを行い、学習のおよそのねらいや方法などを教師が子どもに説明する。子どもたちは、「学習の手引き」（単元名、目標、時間数、標準的な学習の流れ）や学習材（学習カード、ヒントカード、

「〇〇学習」学習計画表

社会「くらしをささえる情報」
理科「おもしろい動きと力」

〇をつけよう
理組単位
しょうとつくり

社会
こつくりひらめき

名前

回	月/日(曜)	計画	学習したこと	ふり返り
		教科 てびき番号	教科 てびき番号	ふりかえり・ふりかえり・ふりかえり・ふりかえり
1	1/18(木)	社会 ①	社会 ①②	ここからいよいよはじまりました。
2	1/19(木)	社会 ②	社会 ③	①を思い出してはじめる。
3	1/20(金)	社会 ③	社会 ④	②がまだ終わってはいないが、はじめる。
4	1/23(月)	社会 ④	社会 ⑤	③がまだ終わってはいないが、はじめる。
ここまでの反省を書きましよう。				
ちょっとおくれたから、もっと進めよう。				
5	1/24(火)	社会 ④	社会 ④	インターネットで調べた。おもしろい。
6	1/25(水)	社会 ⑤	社会 ⑤	がぶりにかゝる。楽しかった。
7	1/26(木)	社会 ⑥	④⑤⑥ ④⑤⑥	④がまだやらない。おもしろい。
8	1/26(木)	社会 ⑦	④⑤⑥ ④⑤⑥	☆の不思議をさがす。おもしろい。
9	1/27(金)	社会 ☆①	社会 ☆	資料がなかなか見つかりました。
10	1/27(金)	社会 ☆①	社会 ☆	レポートの作成。おもしろい。
ここまでの反省を書きましよう。				
レポートの作成。おもしろい。				

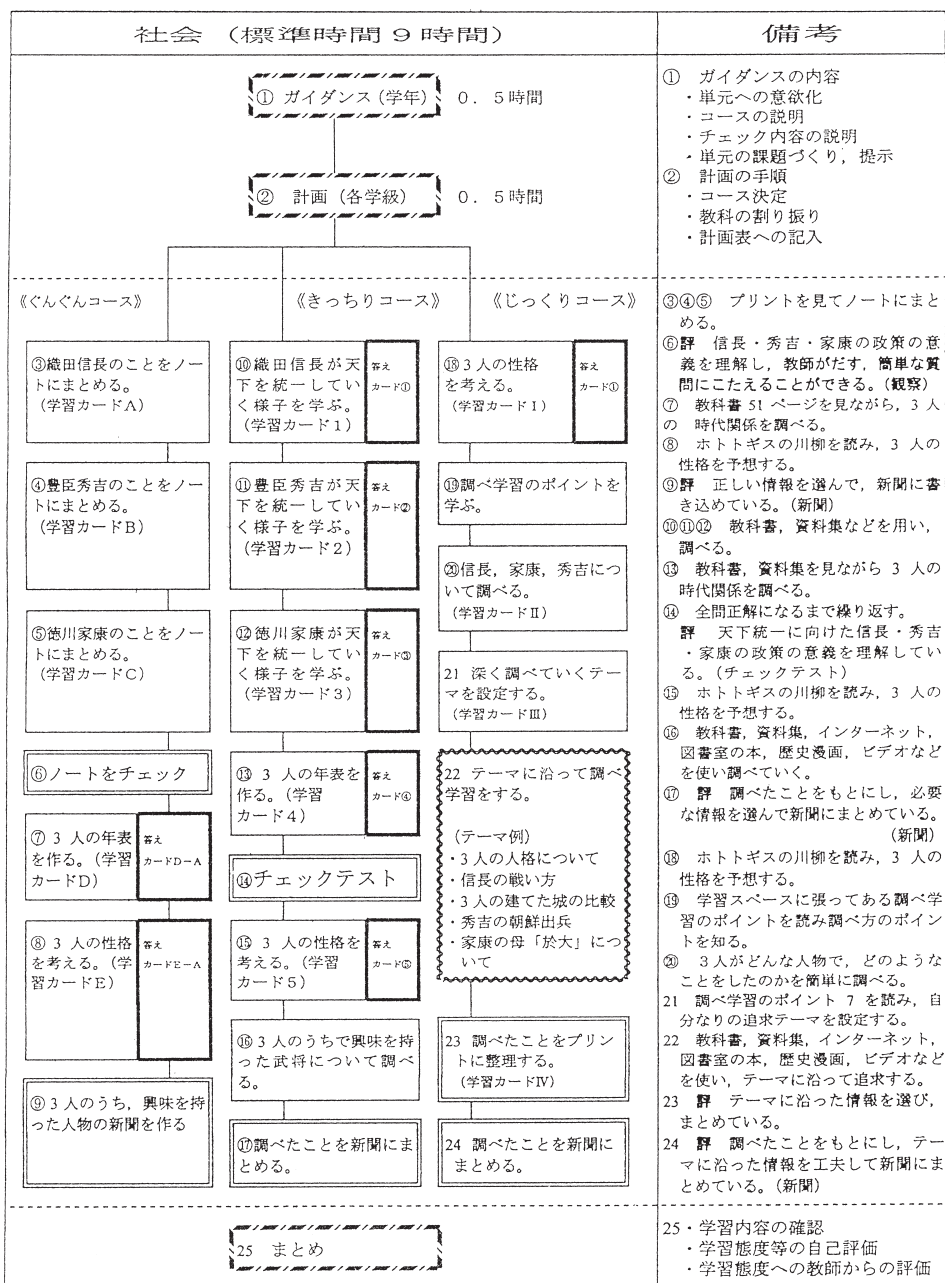
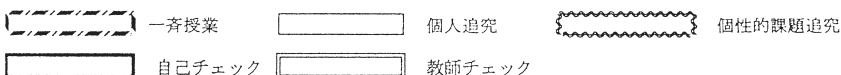
●図3/学習計画表

資料カード、VTRなど）を手がかりに学習を進め、計画を立案すれば、あとは一人学びをする。教師は必要に応じて教えていく。図

3は、児童の学習計画表である。

実際は下記フローチャートのような流れで学習を進めていく。

6年 社会科「信長・秀吉・家康と天下統一」の学習の手引き



(2)仮説1 一人一人の個人差に応じた学習 方法の実践

《手立て1 学習ペースに対応した実践例》

実践①

单元名 国語「物語をつくろう」(1コース)

指導時期 平成17年12月

ア 子どもの様子から

この单元は、これまでの学習経験を生かして、イメージを膨らませて物語を書く内容である。

児童Aは学力的には中位である。普段の授業では、非常に落ち着きがなく、近くの座席の児童にちょっかいをかけたり、机に落書きをしたり、なかなか集中して課題に取り組めない。この学習でも当初、同様の様子であった。国語で物語を書いている周りの子になって、すぐにちょっかいをかけ、集中できていない様子だった。そこで、「A君、君だけの学習場所を作ってあげるよ。大きなついたてを図書室に一緒に持っていこう。」と声かけをすると、児童Aは「そんなことやっていいの?」と目を輝かせた。児童Aは、新たに作り出したその場所で、いつもにはない集中力を見せ、自分のペースで物語づくりに取り組み出した。そして、時間を十分にかけ、原稿用紙7枚の作品「ダイの冒険」を作り上げることができた。



●写真1/一人で物語を書き進める児童A

イ 「物語をつくろう」の実践から

集団学習では、つい周りを気にしてしまうA児のような児童に落ち着いた学習の場と学習のペースを与えることによって、課題へ取り組む集中力を生んだと考える。また、单元内自由進捗学習を取り入れたことにより、日常の一斉指導ではできなかった自分のペースでの課題への取り組みができ、十分満足したようである。このように十分な時間と集中力が児童Aに自分に納得のいく作品を作らせ、学びの実感をもたせたと考えられる。

児童Aが使用した学習の手引き

目標 (標準時間9時間)

- ・イメージをふくらませて物語を書く。
- ・習った漢字を使って物語を書く。

★ チェック

- ★1 漢字テストAで、80点以上とる。(日本人)
漢字読みテストBで、80点以上とる。(外国人)
- ★2 物語を作って、原稿用紙に書く。(2枚以上)
物語は、習った漢字が使っている。(習ってなくても使っても良い)

学習の流れ

① 教科書p54～p57を読む。読めない漢字がある場合はヒントカード1を見る。	
漢字の学習	② 日本人：漢字プリントで、漢字を覚える。(漢字ノートに覚えるまで書く) 外国人：漢字プリントで、漢字の読みを覚える。
	③ 漢字テストを受ける。 日本人：漢字テストA 外国人：漢字読みテストB ★1 先生に出す。(チェック)
	次の回までに、点数を付けて返します。
物語	
④ どんなお話しにするかイメージをふくらます。.....学習カード1	
⑤ 場面設定を考える.....学習カード2	
⑥ 物語のあらすじを考える.....学習カード3	
⑦ 題名、ペンネームを考える.....学習カード4	
⑧ 下書きをする。	
⑨ 推敲する。(文章を直す。)(漢字に直す。) ★ 先生に出す (チェック)	
⑩ 清書する。先生に出す。	
ここまでは、かならず終わらしましょう。	
発展	☆① パソコンを使って、きれいに打ち直そう。
学	☆② 友達の作品を読んで、コメントを書こう。.....学習カード5
習	☆③ もっと長編を書こう。
	☆④

《手立て2 習熟差に対応する実践例1》

実践②

単元名 理科「左右のつりあい」（2コース）

「こつこつコース」	教科書や理科ノートを中心に学習を進める低位，中位向けのコース
「ひらめきコース」	自分で実験方法を工夫して学習を進める上位向けのコース

指導時期 平成17年12月

ア 子どもの様子から

児童Bは、欠席や遅刻が非常に多く、学校へ来ても授業中は、ノートや教科書をほとんど出そうとしなかった。この理科の学習で児童Bは、他の友達にくっついて、見よう見真似で実験の準備をしたり、実験に取り組んだりしていった。時間が進むにつれ子どもたちの進度差が出てきた。児童Cは、学力的には上位だが、もう一方の教科（このときは国語）を中心に進めていたため、理科の方の進度が遅れていた。するとある時、児童Cが実験のやり方がわからずに困っているところへ児童Bが自慢げに教えている場面に出会った。普段の授業では見ることでないことであ

った。児童Bは非常に嬉しそうであった。



●写真2／実験に楽しく取り組む児童B

児童Bが使用した学習の手引き

「こつこつ」コース（教科書・理科ノートで学習）

目標	（標準時間11時間）
・ ぼうが水平につり合う時のきまりを調べる。	
・ 材料を工夫して、「てんびん」を作る。	
・ 上皿てんびんの正しい使い方を調べる。	
・ 「てこ」について調べる。	

★チェック

★1 材料を工夫して、てんびんを作る。
★2 上皿てんびんで「これ何グラム」コーナーの物の重さを量る。
★3 チェックテストを、全問正解になるまでやり直す。

学習の流れ

① 教科書p98を読む。 「ぼうハンガー」を作る。 教科書p99「実験1」をやる。……理科ノートp43に記録する。 ▲答えカード1で、自分でチェック
② 教科書p100を読む。 教科書p101「実験2」をやる。……理科ノートp44に記録する。 ▲答えカード2で、自分でチェック
③ 教科書p102～103を読む。……理科ノートp45にまとめる。 ▲答えカード3で、自分でチェック
④ 教科書p104～105を読む。 教科書p105を参考に、材料を工夫して「てんびん」を作る。 ★1 先生に見せる。（チェック）
⑤ 教科書p106～107を見て、理科ノートp47「上皿てんびんの使い方」に「上皿てんびん」の部分の名前や使い方についてまとめる。 ▲答えカード4で、自分でチェック 「これ何グラム」コーナーから、好きな物一つ持ってきて、「上皿てんびん」を使って重さを量り、カードに書く。 ★2 先生に見せる。（チェック）
⑥ 教科書p108～109を読んで、理科ノートp47「（2）てこ」にまとめる。 ぼうを使って物を持ち上げるときの手ごたえを調べる。 理科ノートp48にまとめる。 ▲答えカード5で、自分でチェック
⑦ チェックテストをやる。 ★3 先生に見せる。（チェック）
ここまででは、かならず終わりますよう。
※①～⑦ 家庭カード「練習問題」を家庭での学習でやる。
※⑧～⑩ 家庭カード2「計算で、つり合いを見つけてよう」
学習
習得

イ 理科「左右のつり合い」の実践から

一人学びを基本とした習熟差に応じた学習は、他人の学習を真似しながら進めることができる。それにより、児童Bに、学習がどんどん進んでいく「楽しさの実感」をもったと考えられる。また、自分が既習したことを他の友達に教えてあげることによって、学習への「自信の実感」をもったのではないかと考える。



●写真3／教え合う子どもたち

《手立て2 習熟差に対応する実践例2》

実践③

単元名 社会科「私たちの暮らしを支える情報」（2コース）

「こつこつコース」	穴埋め式の簡単な学習カードを進めていく低位、外国人児童向けのコース
「ひらめきコース」	調べ学習を中心に学習を進めていくコース

指導時期 平成18年1月

ア 子どもの様子から

児童Dは、外国籍の児童であり、学力は低位である。まだ、しっかりと日本語を理解しておらず、日本語適応教室（来日2年以内の外国籍の児童を対象に、国語と算数の時間を、在籍している教室から取り出して指導を行う教室）に通っている。そのため、普段の社会や理科の授業では、なかなか授業内容を理解することは難しいのが現状である。児童Dは、この学習で外国人児童向けに作った「こつこつコース」を選び、学習に取り組んだ。このコースでは、低位児童や外国人児童をねらい、習熟に応じた課題を設定した。児童Dは学習が始まると課題をどんどんこなしていった。そして、課題をすべて終わると「先生全部終わった。」とうれしそうに報告に来た。その後、児童Dは発展の課題（学校の紹介ホームページを作ろう）に取り組み、友達の課題の進め方を見ながら作品を完成させた。

児童Dが使用した学習の手引き

「こつこつ」コース（教科書学習中心）

目標	(標準時間 11 時間)
・情報をどのように手に入れるを知る。	
・ニュースがどのように作られるかまとめる。	
・情報がどのように使われているか知る。	

★チェック

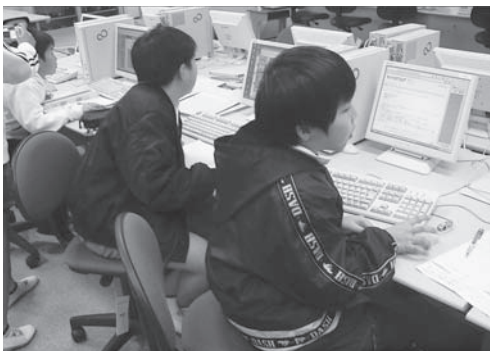
★1 ニュース番組ができるまでを調べ、新聞にまとめる。

学習の流れ

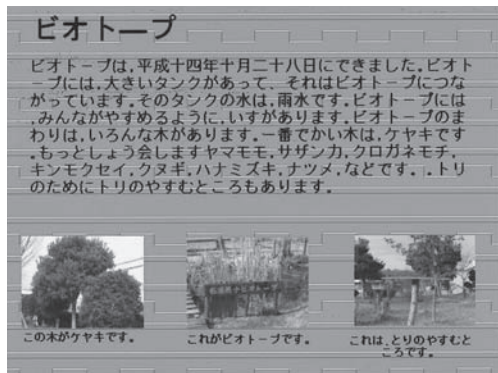
① 身の周りにある情報を知る。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・学習カード1	▲答えカード1で、自分でチェック
② 資料集 P.81 の学習のまとめをみてプリントをやる。・・・・・・・・・・・・・学習カード2	▲答えカード2で、自分でチェック
③ 社会の教科書 P.45 「たしかめよう」を見てプリントをやる。・・・・・・・・・・・・・学習カード3	▲答えカード3で、自分でチェック
④ わくわく写真カードをつかって新聞をつくる。・・・・・・・・・・・・・ヒントカード	★1 先生に見せる。(チェック)
⑤ 資料集 P.81 の学習のまとめをみてプリントをやる。・・・・・・・・・・・・・学習カード4	▲答えカード4で、自分でチェック
⑥ 資料集 P.87 の学習のまとめをみてプリントをやる。・・・・・・・・・・・・・学習カード5	▲答えカード5で、自分でチェック
⑦ 学習のまとめをする。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・学習カード6	▲答えカード6で、自分でチェック
ここまでは、かならず終わらしましょう。	
発展 ☆① インターネット新聞を作ろう	

イ 社会科「私たちの暮らしを支える情報」の実践から

子どもたちの習熟差に応じて数種類のコー



●写真4／課題に取り組む児童D



●写真5／児童Dの作品「学校の紹介ホームページを作ろう」

スを設定したことは、児童Dに「自分で課題を全部終わることができた」という学習の“達成の実感”をもたせ、さらに課題がどんどん進んでいくことにより、学習の“楽しさの実感”を高めさせるのに有効であったと考えられる。

また、発展的な課題を設定し、児童Dがその課題に取り組むことができたことで、「難しい課題にも取り組めた」という学習の“自信の実感”をもたせることができたと思われる。

《手立て3 興味・関心に対応した実践例》

実践④

単元名 社会科「信長・秀吉・家康と天下統一」（3コース）

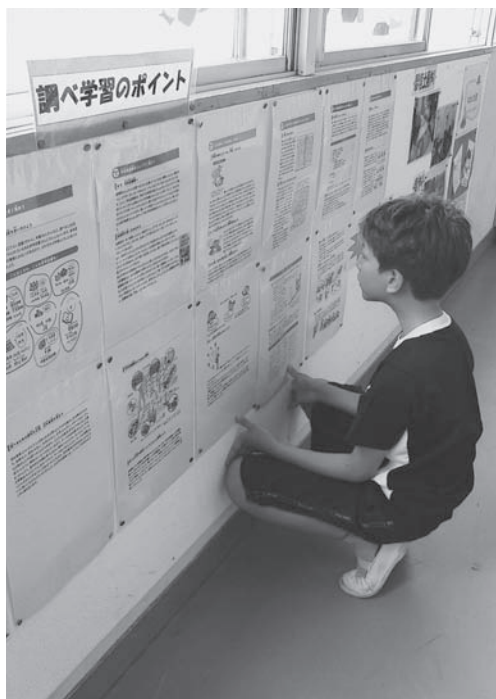
「ぐんぐんコース」	穴埋め式の簡単な学習カードを進めていくコース
「きっちりコース」	カードで学習を進め、その中で興味を持ったことを調べていくコース
「じっくりコース」	調べ学習に多くの時間を使い、自分が興味を持ったことをじっくりと調べていくコース

指導時期 平成18年6月

ア 子どもの様子から

児童Eは、学力は上位であるが、何事にも時間がかかるマイペースなタイプである。社会の学習で児童Eは、上位の児童をねらいとした「じっくりコース」を選んで学習を進め

ていった。調べの時間をたっぷりとした流れになっていたので、児童Eは興味をもったことに時間をかけてしっかりと調べ学習に取り組んでいった。掲示や常設してあった本をじっくり読んで色々な情報を手に入れていった。そして、その情報の中から必要な情報を選び、



●写真6／掲示物を見て情報を探す児童E

児童Eが使用した学習の手引き

「じっくり」コース（調べ学習中心）

目標 (標準時間9時間)

- ・ 信長、秀吉、家康の3人の武将についてテーマを決めて調べる。
★チェック1 学習カード
- ・ 調べたことを新聞にまとめる。
★チェック2 新聞

学習の流れ

	学習内容	教科書	資料集	学習カード	答えカード
①	川柳を読み3人の性格を考える。			カードⅠ	カード
②	学習スペースの調べ学習のポイントを読む。				
③	信長、秀吉、家康について調べる。	46～51	51, 52, 53	カードⅡ	
②	深く調べていくテーマを決める。			カードⅢ	
③	テーマに沿って調べ学習をする。	インターネット（調べる部屋）、図書室の本、歴史まんが、教科書、資料集、ビデオなどを参考に調べましょう。			
④	調べたことをプリントにまとめる。			カードⅣ	
★チェック 1 調べたプリントを先生に見せる。					
⑥	調べたことを新聞にまとめる。	調べ学習のポイントを思い出して書いてみましょう。			
★チェック 2 できた新聞を先生に見せる。					
このまでは、かならず終わります。					
発	☆① 自分が調べたこと以外のテーマで新聞を作る。				
展	☆② 友達の新聞を読んで感想を書く。				
学	☆③ 信長、秀吉、家康のほかに戦国時代にはどんな武将がいたのか調べる。				
習	☆④ 好きな武将の天下統一すごろくをつくる。				

上手に新聞にまとめていった。新聞が完成すると児童Eは非常に満足そうな表情で新聞を持ってきた。

イ 社会科「信長・秀吉・家康と天下統一」の実践から

「〇〇学習」の興味・関心に応じた一人学びは、児童Eのように自分の得意な方法での学習を保障し、自分の納得のいく新聞を作ることができた。この新聞の完成は、児童Eに学習への“達成の実感”をもたせるのに有効であったと考えられる。

(3)仮説2 一人一人に応じた学習を支えていく人的・物的学習環境の実践

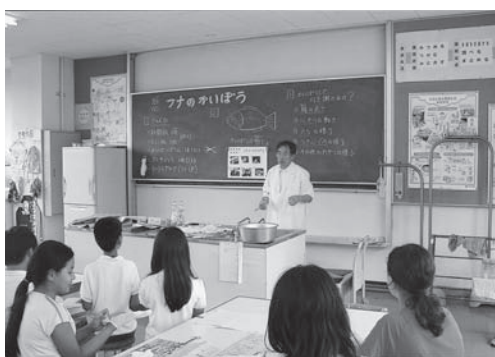
《手立て1 人的環境の構成》

①学年チーム・ティーチング

「〇〇学習」は学年を解体して、学年担任2名と専科教員、日本語指導適応教室担当教員などでチーム・ティーチングを組み、一人一人の子どもに対応できる体制で指導している。

②ボランティアの導入

ボランティアの方を招いたり、校内の教師の得意な分野の力を借りて、子どもたちの興味・関心に基づいた講座を開いた。



●写真7／教頭先生によるフナの解剖講座

《手立て2 物的環境の構成》

①スペースの確保

子どもたちの学びの場は、教室を基本とし

たが、一人で落ち着いて学習したい児童のために廊下や図書室などを仕切って、落ち着いた一角を作った。また、ビデオやDVDなどを子どもたちが視聴する時のために、テレビとビデオプレイヤー、DVDプレイヤーを色々なところへ設置し、子どもたちが自由に見ることのできるスペースを確保した。



●写真8／設置したビデオで学習する児童

②学習材の配置

学習カードでは、文字に振り仮名をつけるなど子どもたちの実態に合ったカードを作成した。そして、その単元に関連した図書やビデオなどをできるだけたくさん用意し、子どもたちがいつでも使えるように一箇所にまとめて置いた。また、それらの学習材は、子どもたちの活用動線を考え、整然と片付くように配置した。また、子どもたちがそれらを使いたくなるような「学習の流れ」も考えた。



●写真9／子どもたちが使いやすいように考えた配置

③掲示物の工夫

掲示物は、子どもたちが普段の生活の中でも目にする、授業時間以外にも学ぶことができるものである。そのため、子どもたちの目を引くような掲示物を作るように心がけた。また、子どもたちの意見を掲示したりすることで「一人学び」の中でも、子どもたちが相互に学び合える機会を提供することができるようにした。

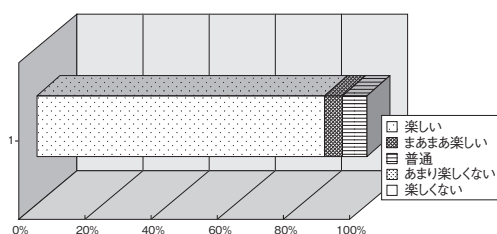


●写真10／6年理科 天井へ小腸を掲示

6 考察

(1)〇〇学習の意識調査から

「〇〇学習」の意識調査を平成18年度7月に行った。『「〇〇学習」は楽しいですか』という項目に対して、「楽しい」「まあまあ楽しい」「普通」「あまり楽しくない」「楽しくない」の5段階の評定尺度を用いて回答を求めた。結果は図4のとおりであった。結果からほとんどの子どもたちがこの学習を楽しんでいると



●図4／「〇〇学習」の意識調査の結果

感じていることがわかる。そして、「どうしてこの学習は楽しいと思いますか。」という問いに対して、「自分のペースで学習できる。」や「両方の教科を自分の好きなように計画できる。」などの回答がみられ、この学習のメリットを子どもたちが感じ、楽しい学習という意識をもっていることがわかる。この結果から「〇〇学習」が子どもたちに学習への“楽しさの実感”を高めたと考えられる。

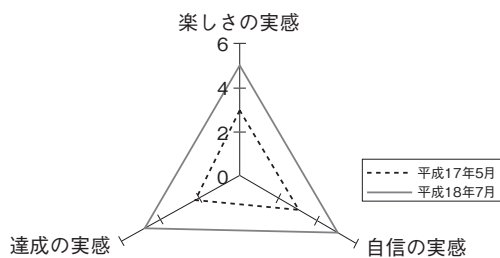
また、『「〇〇学習」のよいところはどこですか』という問いに対して、「自分のペースでどんどん学習が進むところ」「難しい問題にも挑戦できるところ」といった回答がみられた。この学習で、ほとんどの児童が「最低ライン」をクリアし、発展学習に取り組むことができています。以上のことから子どもたちはこの学習で、課題をやり遂げたという学習への“達成の実感”をもち、そして難しい課題に挑戦できた、達成できたという学習への“自信の実感”をもったと考えられる。

もちろんアンケートの中には、よい感想ばかりではなく、「この学習を上手に進められなくて困った。」という意見も見られた。このような児童は、普段の斉授業では与えられた課題をうまくこなしているが、いざ一人で学習を進めていかななくてはならない場面では、とまどってしまうタイプであると思う。これは、この学習をした結果、気がついた「自分への気づき」であったと考えられる。

(2)学習に対する意識調査から

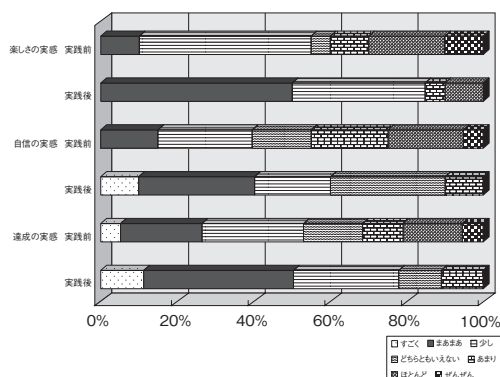
平成18年7月に、学習に対する実態を把握するための2回目の意識調査を実施した。図5はその結果である。前回より各項目において、伸びが見られた。

この結果から「〇〇学習」が子どもたちの3つの学びの実感を高めるために有効であったと考える。



●図5／学びに対する意識調査の変容

また、図6は、各項目ごとにおける人数の割合を示したものである。注目したいのは実践前には各項目ごとに数人見られた「ぜんぜんない」が、実践後には一人も見られなくなっている。そして各項目で、「すごく」「まあまあ」の人数が大変増えている。このことから全く学びに対する実感をもてなかった児童はいなくなり、学びに対する実感が強くなった児童が増え、一人一人に学習が成立してきたと考えられ、「〇〇学習」の有効性が証明できた。



●図6／学習に対する意識調査の項目ごとの割合

(3) 学力検査の結果より

学びの実感を一人一人がもち、一人一人に学習が成立したことで、さらに影響したことがみられる。それは、学力である。6年生4月の学力検査において、4年生のときに比べ、国語で平均偏差値3.4ポイント、算数で平均偏差値5.7ポイントの上昇が見られた。「〇〇

学習」が子どもたちの学習への意識を変え、その結果、学力をも向上させてきたのであると考えられる。

7 研究の成果

これまでの実践において、一人一人の個人差に応じた学習方法を工夫し、一人一人に応じた学習を支えていく人的・物的学習環境の構成をすることで子どもたち一人一人に学びの実感（“楽しさの実感”“自信の実感”“達成の実感”）を味わわせ、一人一人の学力を向上させることができるということが明らかになった。

○一人一人の個人差に応じた学習方法の工夫

では、特に子どもたちの学習ペース、習熟差、興味・関心などの手立てによる学習を計画し、子どもたちがその課題に対して、自分にあった学習スタイルで一人学びしていくことが有効であった。

○一人一人に応じた学習を支えていく人的・物的学習環境の構成

では、子どもたちの学習に必要なスペースや掲示等子どもたちに適した学習材を提供した。そして、その環境を構成するときに、子どもたちが自然にそれを使いたくなるような学習の流れを工夫していくことができた。

8 今後の課題

本研究で学習方法の中核とした多様な学習方法を取り入れた「〇〇学習」は、子どもたち一人一人の学びを成立させていくために有効であったと考える。この学習は他学年において「学習の実感」をもてずにいる児童にもきっと有効な手立てであると考えられる。今後は、全校でこの実践をし、一人一人の学びの成立と学力を克服する「〇〇学習」の有効性の一般化を図っていきたい。

9 おわりに

昨年(2016)の4月、クラスの子どもたちは、学習への意識が非常に低く、授業を進めるのが困難であった。教師経験の少ない私は、先行きに不安を感じずにはいられなかった。この1年半の間、何とかしようといろいろ試み、必死にもがいてきた。それは、「何とか子どもを変えたい」という思いからであった。

学びの実感をもたせる「〇〇学習」を通して、子どもたちは確実に変わってきている。今では、授業も落ち着いた雰囲気になっている。子どもたちの成長を私自身、うれしく思っている。

3月の卒業まで残り半年となった。子どもたちの学力は伸びたとはいえ、現状は厳しい。子どもたちの今後の人生を有意義なものにするためにも、「学びの実感」をより高めるように、今後も実践を続けていきたい。

〈参考文献〉

- 小学校学習指導要領 1998 文部科学省
東浦町立石浜西小学校 2005 平成17年度
研究紀要
加藤幸次(編著) 1985 個別化・個性化
実践に学ぶ 明治図書
加藤幸次(編著) 1992 個性を生かす
学習環境づくり きょうせい
水越敏行(編著) 1988 著個性化教育へ
の新しい提案 明治図書
愛知県緒川小学校(著) 1983 個性化教育
へのアプローチ 明治図書